僕は後悔していない

聞き取れないが、彼女が喋っているらしい声がする。

多分、お母さんとだろう。
「彼女がいる、よかった！」
僕はうれしかった。

自分が、不安に満ちた未知の迷路を、
また一歩、前進した思いになった。

さあ、どう態度を取ったらいいのだろうか。
暑い。
応対するにしても、
初めから、けなす様な態度は、取らないだろう。

自分の気持ちを静めるのに僕は懸命だった。

どうしたらいいんだ！
男なんだろ！
男なんだろ！
やる！

そう僕は自分に言い聞かせた。
しかし、またもや、ひるみが出て来た。

しかし、ちょっと、待ってくれ！
ちょっと！
彼女に気がないのは事実じゃないのか！
中書島まで来なかった。
これ以上、近づく必要が本当にあろうか。

萩原良昭